

論文 / 著書情報
Article / Book Information

論題(和文)	知財見聞録, インドネシア共和国マルク州アンボン島での巡回セミナー
Title(English)	
著者(和文)	田中義敏
Authors(English)	Yoshitoshi Tanaka
出典(和文)	発明, Vol. 114, No. 6, pp. 34-35
Citation(English)	, Vol. 114, No. 6, pp. 34-35
発行日 / Pub. date	2017, 6



知財見聞録

インドネシア共和国マルク州アンボン島での巡回セミナー

東京工業大学 工学院 経営工学系・経営工学コース 教授 田中 義敏

未知の島への訪問

インドネシア共和国のアンボン島といわれても、どの辺りの島かご存じない方も多いと思う。地図で探そうとしても簡単には見つけられないかもしれない。

筆者は、3月16日から18日まで、インドネシア法務人権省とJICAが主催するセミナーのためにアンボン島を訪問してきた。

アンボン島は、スラウェシ島とニューギニア島の間のインドネシア東部に位置し、マルク州の州都アンボン市を有する島で、日本との時差はない。筆者は日本と同じ時刻の地域がインドネシアにあることを初めて知った。

アンボン市は、人口約31万人の小さな田舎町でありながら、オランダ文化の影響を今なお残しているセンスのいい町といった感じである。

長くオランダの影響を受けた島

1513年、最初のヨーロッパ人としてアンボン島に上陸したポルトガル人の目当ては東方の香辛料であったが、香辛料貿易を統制できないうちにオランダ人により島から追い出される。1605年にオランダが無血でとりでを引き継いだ時には、既にポルトガル人はオランダ人に追い出された後であった。

島の西北岸に築かれた要塞^{ようさい}Benteng Amsterdamは、バンダ湾とセレベス湾のちょうど中央に位置し、海域を往来

する敵船の監視・攻撃に格好の場所となっていた。

それ以降、一時的にイギリスの侵攻にさらされたものの、第二次世界大戦まではオランダの支配の下に存続してきた島である。

独立を目指したマルクがインドネシア共和国に併合

1945年、第二次世界大戦終結とともにインドネシアは独立を宣言する。スカルノ大統領が中央集権国家を目指したことに加え、民族的、宗教的な緊張の結果、アンボン市は、1950年の「南マルク共和国」の独立運動の中心地となるが、数週間でインドネシア政府により鎮圧された。これが、わずか半世紀前の出来事である。

さらに、1958年4～5月には、隣島の北スラウェシ州で、米国が支援したペルメスタによる反乱をきっかけとして、インドネシア軍と米軍の間で激しい戦闘が繰り広げられた。

宗教上の対立は解消したのか

その後はインドネシア共和国マルク州として安定した期間が続いたが、1999年にキリスト教徒・イスラム教徒の間で「マルク諸島・アンボンの宗教紛争」が発生した。この紛争によりマルク州では4000人の死者と40万人の難民を出している。

また、比較的最近の事案としては、

2012年5月、アンボン出身の国民的英雄の生誕記念日に負傷者約50人を出したMardika地区のキリスト教徒とBatu Merah地区のイスラム教徒の衝突もある。

これら宗教上の対立は今もなお完全には収束していないが、現地住民にいわせると、現在は宗教を超え異なる民族が一緒になって暮らしており、全く問題ないとのことである。

勢いのある質疑

アンボン市を中心とする南マルク共和国としての独立の動きや長年にわたりくすぶっている宗教上の対立を説明してきたことには理由がある。

筆者が講演者として^{しょうへい}招聘された当地でのセミナーは2日間であったが、セミナー会場での質疑応答を聞いていると、やり取りの実質的な内容とは別に感じるものがあつた。特にジャカルタの中央省庁職員に対する質問は、インドネシア語を理解しない筆者にも話し言葉の勢いだけで対決的な雰囲気^{しやうへい}がひしひしと伝わってきた。

この様子から東西方向の距離が米国の東西距離と同じくらいになる幅広の国土を持ち、しかも多くの島々で構成されているこの国を統制することの難しさを感じた。

インドネシアにおける中央と地方の格差は日本の地域格差とは比べ物にならないと思う。

アンボンを視察

セミナーが無事に終了した最終日には島の西側を海岸沿いに案内してくれた。日本語の旅行ガイドブックには掲載されていない珍しい地域なので、ご参考までに紹介したい。

村の温泉から国立大学へ

アンボン島は火山島でもある。Desa Tulehu村には、当地では珍しく温泉がある。しかし、肌を人前で見せないイスラム教では足湯がせいぜいようだ。

次いで、パティムラ大学を見学。1962年開校の同大学は、アンボン市にある国立大学で、高等教育学位を授与するコースとプログラムを提供しており、また、図書館をはじめ充実した設備を有している。鹿児島大学や広島大学とも提携校となっており、優秀な人材を輩出している。

巨大ウナギ村から古いモスクへ

巨大ウナギを育てている村が観光名所になっている。体長1～2メートル、腹の直径が10～15センチメートルくらいある巨大ウナギを観光客に素手で触らせてくれる。

これほどのサイズに成長するには15～20年くらいかかるそうだが、大切に育てており、言わば村の守り神のような存在だ。ここまで大きくなったウナギに触れるだけで何か御利益があるような気がした。

ウナギ村の次に目指すのは、現存するインドネシア最古のモスク、“Mesjid (モスク) Tua (古い) Wapaue Kaitetu”である。

モスクの碑文には1414年に建立されたと記されている。アンボン島には、非常に長いイスラム教の歴史があったことを示している。

そびえ立つ要塞

アンボン島北側の海岸には、一帯の海域における監視・攻撃の重要拠点であった要塞が残されている。要塞の中には、この地をポルトガル人が香辛料貿易の拠点とした歴史に関する展示があった。

いろんな世界が見えてくる

狭い道路を突っ走ってアンボン島の雰囲気を感じてきた。島内の陸の孤島である小さな村では多くの子どもたちが遊んでいる姿を目にする。子どもが多く、貧しい生活を余儀なくされている村である。インドネシア共和国を平均した貧困率が12.5%であるのに、アンボン島では27.7%という統計がある。筆者らが訪れた田舎の貧しい村人たちが貧困率を高めているのかもしれない。



筆者の講演



インドネシアでは珍しい温泉（足湯）



1414年に建てられたモスク



御利益がありそうな巨大ウナギ



今も残る要塞